

”被爆70周年二中慰霊祭にあたって”

浅野兄代表スピーチ

県立広島二中・23期卒業生の浅野と申します。

今日は、被爆70周年の広島二中原爆死没者慰霊祭にあたり、「あの日」、広島二中2年生だった我われの“身代わり”のような形で、全員が原爆の犠牲となられた1年生・24期321名、および引率の4人の先生、このほか動員先、あるいは病気などで自宅療養中に、原爆の犠牲となられた計母校関係者計352名の御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

人類史上初の原爆が広島に投下された昭和20年8月6日、広島二中の3年生以上は軍需工場に通年動員されており、学校には我われ2年生と入学して間もない1年生しかいませんでした。当時、広島市中心部では大規模な建物疎開作業が実施されており、1年生と2年生が、“1日交替”で授業と作業の毎日でした。そして8月に入って、作業の割り振りが、2年生が奇数日、1年生が偶数日と決まり、原爆投下前日の5日は、我われ2年生が、現在の平和記念公園（中島町）の南よりにあった旧広島県庁周辺で作業に従事し、翌6日、1年生が、爆心地から約500mの西平和大橋東詰めの、この地で被爆、全員が犠牲となられたのです。

我われ2年生は、登校日の6日、急に予定が変更となって、現在のJR新幹線広島駅北口あたりの東練兵場で芋畠の草取り作業中に被爆、全員が大ヤケドをしました。全市が一瞬にして壊滅、炎上した訳ですから、満足な手当てを受ける所も、薬も無く、2週間、1カ月と寝た切りの者も多く、ランニング姿でヤケドした者の中には、今もケロイドが残る者もいます。そして作業現場に赴く途中で被爆し、遺体も見つからなかった仲間も8人います。

今から20数年前になりますが、還暦を迎えた我われ23期の仲間が、被爆体験を書き残しておこうじゃあないか”と皆に呼びかけ、140ページばかりの「ポプラは語り継ぐ」という被爆体験記をまとめています

その序文に「あの日、たった1日違いで私たちの身代わりとなった1年生321人の事を思う時、死ぬべきはずだった命を永らえているのでは、というしるめたさから逃れることができません。あの日が、5日でも、7日でも、私たち3百余名の名が慰霊碑に刻まれるはずでした」と書いています。

偶然としか言いようのない作業の割り振りが、私たちの生と死を分けたのです。「あの日」から70年、我われ23期生は、12歳のまま眠っている1年生の御霊と、遺族の悲嘆に対し、申し訳ないような思いを引きずって生きて参りました。

被爆25周年にあたる昭和44年8月、広島テレビ放送が、「碑・いしぶみ」のタイトルで特別番組を制作・放送したことがあります。原爆で全員が犠牲となった広島二中1年生の記録です。この番組は、この年の芸術祭・テレビ部門で優秀賞を受賞し、放送後、ポプラ社から出版されました。

この本の中には、瀕死の大ヤケドをしながらなんとか家までたどり着いた者や、家族が臨時救護所などで見つけた1年生が、死ぬ前に言い残した言葉や、わが子の遺体すら見つからなかった遺族を含め計226人の証言と、1年生の生前の顔写真などが載っています。

全身に大ヤケドした引率の先生は、生徒と一緒に川に入り「泳げる者は川を渡れ、泳げぬ者は“海ゆかば”を歌って立派に死のう」と訓示され、“海ゆかば”を歌ったあと、皆で“天皇陛下、バンザイ”を唱えた。そて友達のひとりには、“もうダメだ。先に行くよ””と言って流れて行った””と言ひ、数千度の熱線に焼かれた生徒は「お母さん、砂も燃えたんよ」と言い残しています。そしてある母親は、息子のヤケドの血・膿の中に涌いた八工のウジ虫を捕ってやりながら、「あんたが逝くときは、おかあさんも一緒に逝くからね」と言う、ヤケドでつぶれた口で「あとからでいいよ」と言った、という話…。最後のひとりが息を引き取ったのは6日後の8月12日でした。

私は、この本を読む度に、“身代わり”になって死んだ1年生の無念と遺族の悲しみを思い、涙で言葉がつまります。遺体さえ見つからなかった1年生たちは、身元不明のまま茶毘にふされ、原爆慰霊碑に近い供養塔に眠っておられるのでしょうか。

私は、お隣にある原爆資料館で、1年生の遺品・折免滋君の「黒焦げの弁当」や朝日俊明君の「焼け焦げた制服」などを見る度に、痛恨の思いに胸がつまります。

「碑」を制作した広島テレビの薄田純一郎報道制作部長は、広島二中の20期生で、弟の昭二郎君は我われと同じ23期生です。一命を取りとめた弟の“身代わり”となった後輩への追悼の思いが、番組制作の動機だったのでしょう。

浅野代表スピーチ.txt

また、テレビ番組「碑」に感動した我われ同期生で、当時、広島男性合唱団・広島メンネルコールの代表だった山本定男君が、広島テレビの薄田先輩に呼び掛けて、鎮魂曲「レクイエム碑」が誕生、被爆25周年の昭和45年10月に初演奏されました。作詞は薄田純一郎、作曲・森脇憲三（福岡教育大教授・二中8期）、指揮・山本定男の二中トリオでした。>

「碑」にまつわるエピソードに限らず、広島二中同窓生の中には、犠牲となった1年生への追悼、生き残ったことへのうしろめたさのような思いがあるのでしょうか。とりわけ1年生の犠牲によって生き残った23期生の思いは、強いように感じます。

私は、定年まで、地元・中国新聞社で編集記者をしておりまして、毎年8月の原爆・平和報道には、特別取材班として何度か取材にあたり、昭和40年に日本新聞協会賞を受賞した「ヒロシマ20年」では、8人の取材班のひとりとして「世界にこの声を」という被爆者の訴えを長期連載したりしました。また新聞社の1年先輩・満井晟記者は、二中22期で、昭和39年春、広島・長崎世界平和巡礼団の一員として、イギリス、アメリカ、フランス、ソ連を歴訪、同57年には私も、イタリアで開かれたキリスト教団主催の世界平和集會に、ヒロシマの被爆者代表の一人として参加、被爆証言と核廃絶を訴えてきました。

このほか昨年末、亡くなった23期の荒谷勲君は、Hiroshima Interpreters for Peace(HIP)のメンバーとして、永年、外国人観光客のボランティア・ガイドを勤め、「レクイエム碑」の山本定男君は、今年6月、米国ワシントンを訪れ、核兵器廃絶を訴えて帰国、被爆地ヒロシマでは、二中同期の国重昌弘君も数年前から修学旅行生を対象に証言活動を続けています。また私自身も、広島市の平和推進部が、年々、減少していく証言者への対策として、被爆体験の証言者と伝承者の募集をしている事を知り、新聞記事を通じて被爆者の訴えを代弁してきたつもりでしたが、あの原爆の生き残りのひとりとして、自分の言葉でも語り継ぐべきではないかと、今年5月から広島市の囑託証言者の委嘱を受け、語り部活動に参加しております。

毎年8・6慰霊祭には、このような思いを抱く23期の仲間10数人が参列、犠牲となった1年生を偲び、式後は被爆体験を回顧しながら、同期の絆を強めております。

伝承者の募集には、遠隔地をふくめ、核兵器廃絶と核のない平和な世界実現を願って、若い世代の反響・応募も多いようです。広島二中の系譜につながる観音高校でも、毎年、8・6関連の行事や平和学習などが続けられているようですが、24、23期のような先輩たちの受難の歴史がある事を知ったうえで、被爆体験の継承と核廃絶の運動に参加していただきたいと願っています。

被爆70周年の母校広島二中の原爆慰霊祭に際し、改めて、犠牲となられた御霊に捧げる、哀悼の言葉といたします。